“号外,,パート12　平成25年1月15日　発行所:四国時報

「さや侍・川上道大」 最初の勢いは何処へやら
四国タイムズと偽情報提供者たちの大誤算

〒768-0011
観音寺市出作町 603-3
電話　0875-25-6883
編集発行人　木下俊明

民法⇒不法行為(第７０９条)・(第７１０条)
刑法⇒名誉毀損(第２３０条)・侮辱(第２３１条)
信用毀損及び業務妨害(第２３３条)の法律に該当する

被告川上からの本紙及び原告への誹謗・中傷・挑発報道への反撃号外も、昨年１月１１日発行第１号から数えて、今回で第１２号目となった。被告川上は、長年使って覚えた手練手管を駆使して「三百代言」を述べ列ねた「荒唐無稽」な記事を、憶面もなく報ずる悪行を続ければ続ける程、己の愚かさを世間の人々に曝すことになっているのだが、それにも気付かぬ間抜けな奴だ。早速、四国タイムズ１月５日発行記事に反論、指摘してみよう。被告川上は、何の証拠もないにもかかわらず、ただ一途に原告が天下の六代目山口組から指令を受け、被告川上に対しておる等と世迷い言を書き立てている始末。又、作家・宮崎学氏の著書から引用した文を、己に都合良く歪曲したのか、それとも被告川上の読解力の低能振りか、原告の預かり知らぬ所での発言があったとする説明・台詞と同じ等と寝言を言う始末。やはり被告川上の精神状態に問題があると言っている人が居たが、原告にもそのような感じがしてきている。原告の号外パート１を読み返してみて欲しい。原告は、卑劣な攻撃をされた一昨年１２月５日の四国タイムズ報道へ即座に、その実態と背景について即刻、観破した内容で反論している。単純なのか、少々思考力に問題があるのか、被告川上は怒りと浪狽からか報道記事の内容に矛盾や、不整合を露呈する破目になって、次から次へと妄想記事を恥じも外聞もなく、形振り構わず、今や、先の大戦末期の玉砕戦の有様だ。己が毎号で書いておる噂報道・前知事、現知事についてと、１３年も昔の襲撃記事等に、こともあろうことか原告とを結び付けようと気違い地味た記事に、原告の知る限り多くの議員さんや、世間の人々の物笑いになっていることを被告川上は知らないのであろうか。原告が、被告川上の四国タイムズを妨害したと臆面もなく記しておるが、原告が何時どのように、ゴロ付ゴシップ新聞・川上の行為を妨害したと言うのだ。己から売った喧嘩を「想定外」に原告に買われ、痛烈な反撃・反論されたことをお前は妨害されたと言うのかね？勝手都合もいい加減にせんかい!重ねて言うまでもないのだが、原告の名誉にかけて「四国時報」の発行と「号外」は、誰からの指示・指令等、断じてない。あると言うなら、くだらないゴシップ記事を省き、具体的に示してもらおうではないか。被告川上は当初から「六代目山口組倭和会企業舎弟」等と決め付けた記事で、又、原告に関し、極めて侮辱的表現方法を用いて個人攻撃に及んでおり、原告の社会的評価を著しく低下させることを目論んだ、原告の名誉及び信用を毀損する行為と言える。さて、「号外パート１１・１２月１１日発行」で記した**観音寺市常磐地区在住の偽情報提供者・十鳥晴美氏(男性)**について、少々の反響があった。十鳥氏を知る人達は、異口同音に彼の大法螺吹きは有名とのことであった。類は類を呼ぶとは本当によく言ったものですね。

裏面へどうぞ

もう一つ、四国タイムズ１２月５日号の記事中に、現知事に１１月の議会でバッタリ出会っての場面が記されており、被告川上が「現知事に罵声を掛けた･･･」との文を読み進んだ時、原告の脳裏に一瞬「オッ!川上もなかなかやるな」と思いつつ、次へと読み進んで笑ってしまった。正面切って堂々と声を掛けたのかと思いきや、文では何と「知事の背中に向かって叫んだ」とある。正面から行けよ～(笑)こんな姿が、四国時報に刀をへし折られた「さや侍・川上道大」の正体を暴露している。これが、しばらく県議会へ姿を見せなかった被告川上が、久しぶりに県庁に出向いた時の出来事である。かつての被告川上は、県庁舎等において、傍若無人に誰彼見境なく慢罵行為に及び、総スカンを喰っていたことも衆知の事実だ。いずれにせよ、間違いを犯せば相応の結果を伴うことは、世の理である。原告に後ろ盾が、さも居るとの妄想を抱き、本心は脅え戦き、それを見透かされまいと、強がって見せる被告川上に最近、同情心が湧いてくるのが不思議だ。**「それでは、被告川上の後ろ盾は一体誰やねん？」**四国時報の愛読者はすでにお気付きですよね。四国タイムズの記事には二通りの記事がある。一つは、悪質な記事。もう一つは、極々悪質な記事である(笑)。原告のひとり言ではあるが、よくもまぁ･･･こんな程度で、よく２１年余りも続けられるなぁ･･･まぁ反面教師にはなるけんど･･･「最初の勢いは何処へやら」四国タイムズの四国時報への悪質捏造記事も当初(平成２３年１２月５日号)より、相当トーンダウンしてきた感がある。無理もない。喧嘩を売る相手を甘く見過ぎたのだ。素人の喧嘩自慢が集結する地下格闘技でさえ、対戦相手のことを多少なりとも研究する。「任しとき!木下如きウチが叩いたらすぐ引っ込みますよ」と意気込んだものの、即座に原告から抗議文・号外と想定外の反撃、訴訟までされ焦る被告川上。原告を叩いても叩いても、叩き返される。「こんな筈やなかった･･･(泣)」精神的に追い詰められながらも、引くに引けない。遠隔操作され観音寺市内で情報収集に狂奔するも、これまた偽情報提供者たちのお粗末な偽情報ばかり。「恐れ入る」「脅しだ」「妨害だ」と泣きが入ったかと思えば、「看過できない」「以ての外だ」と十八番の台詞で強がっても見せる。武道家と言うなら武道家らしく、サムライと言うならサムライらしく、潔く負けを認めたらどうかね？「勝てないけど負けない」こんな戦いをして四国タイムズの評価が上がると思ったら大きな間違いである。世間の野次馬さんにとっては、他人の喧嘩は、大きいほど面白いものだ。原告は、戦い続けるも良し、又、矛を収めるも良しで臨む度量は持ち合わせているつもりだ。被告川上唯一の貢献(笑)は、前にも述べたが、この戦が結果的に四国時報の知名度を拡めることになったことである。憚りながら、被告川上の新聞記事は、以下に記す言葉の限りで読者からは、嫌気を抱かれている。順不同で記してみよう。悪意・悪行・悪質・悪態・悪党・悪罵・悪評・悪辣・卑劣・邪推・邪魔・馬脚・捏造・怨念・妄想・盲動・野武士・野伏り・不実・挑発・悪鬼・悪戯・悪逆・悪才・悪玉・悪徳・悪道・悪癖・悪友・悪漢・悪性・他まだまだ多くの言葉が、被告川上には当てはまる程の報道の歴史と聴いている。いずれにせよ、お陰様で原告発行紙「四国時報」は、今号より増ページ版となった。もはや、被告川上たちの目論んだ当方潰しの企みは、泡となって消えたことを、いくら鈍くとも解る筈だ。最後にはっきりと宣言しておくが、原告の四国時報は、四国タイムズとは異なり、あくまで原告一人の意志で編集発行しており、どなたからも命令・指令を受けていない!!